

「新しい日常」も悪くない



合瀬 宏毅

新型コロナウイルスに対する緊急事態宣言が解除され、私たちは「新しい日常」への取り組みを求められることになった。日く、人との間隔は2メートル開けること。会話をする際は、真正面を避けること。買い物は一人で行くことなどなどだ。中には、感染したときのために、誰とどこで会ったのか、常にメモするというものもある。

メモする習い性はあるものの、箸の上げ下ろしまで指図する厚生労働省の実践例、バカバカしいとは思いながらも、感染後あつという間に重篤化する事例や、後遺症が残る可能性が強いなどと聞くとつい、従っている自分がいる。

言うまでも無く新型コロナの蔓延は私たちの暮らしを劇的に変えた。ただ、新たな発見もあった。オンラインツールが意外と使えることである。大日本農会でも4月の懇話会で初めてZoomを使って講演が行われ、われわれ日本農業経営大学校でも前期の講義は全てオンラインで行うことになった。一学年20名の小所帯である私たちの教育機関では、生徒は全国から、また講師の多くも外部にお願いしている。講義に使う機材、生徒が住む農村での通信環境など様々な戸惑いの声や課題はあったが、生徒を待たせることは出来ない。とにかく始めてみることにした。

ところが始めてみるとこれがなかなか面白い。今はほとんどのノートパソコンにカメラやカメラはついている。相手の顔ははっきり見えるし音声も綺麗だ。別にディ

スプレイを用意すれば25人までは大きく顔を映し出してくれる。生徒の顔が見えないと授業が出来ないという講師もいたが、かえって見えすぎて、生徒は居眠りも出来ないくらいだ。生徒が集中して聞いてくれるので、今までよりやりやすいという先生もいる。しかも距離は全く関係ない。海外からのゲストを呼んで、授業を行うことも出来るようになった。私などはこの機能を利用して、久しぶりに遠く離れている学生時代の友人と、オンライン飲み会をやってしまったほどだ。なるほどこれが「新しい日常」なのか、とも思う。

考えてみると我々はこうした新たなテクノロジー導入を、様々な理由を付けて先延ばししてきた。使い勝手が悪い。使えない人がいるから不平等。セキュリティが心配だ、などなど。しかしざら使ってみると、使えないのでは無く、使いたくなかったというのが本音だったのかと思う。従来のやり方を変えると、既得権益が侵され、困る人もいる。ただ、環境が変われば我々も変わらなければならない。そのことは歴史が証明してくれている通りだ。

NHK時代の初任地、鹿児島には「泣こかい、跳ぼかい。泣こよかひっ跳べ」という言葉があった。やるかどうか迷ったらやってみようということわざである。制限された日常のなかで、どんなことができるのか。改めて考えてみねばと思う。

(おおせ ひろき 日本農業経営大学校副理事長)
大日本農会理事